

南アジアの信仰と神話的世界

会期 2012年 4月 5日 (木) ～ 7月 3日 (火)

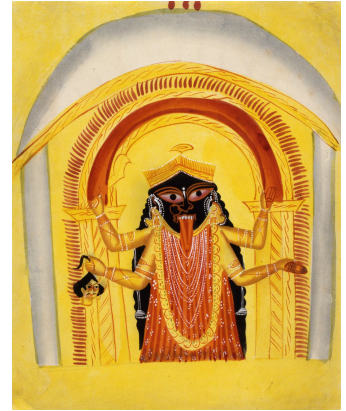
会場 アジアギャラリー A

 福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum

1 ヒンドゥー教

バラモン教のヴェーダ聖典にインド各地の民族宗教や民間信仰が複雑に絡み合いながら形成されたヒンドゥー教は、カーストという身分制度からもわかるように、宗教という範疇を超え、人々の生活に深く結びついています。南アジアにおいては、インドに 8 億を超すヒンドゥー教徒がいるとされますが、それ以外でもネパールでは約 8 割の国民がヒンドゥー教を信仰しています。このコーナーでは、インドとネパールからヒンドゥー教の神々やその神話的世界を絵画化した「カーリガート」「ミティラー画」「ヴァルマー・プリント」「ポーバ」などを紹介します。

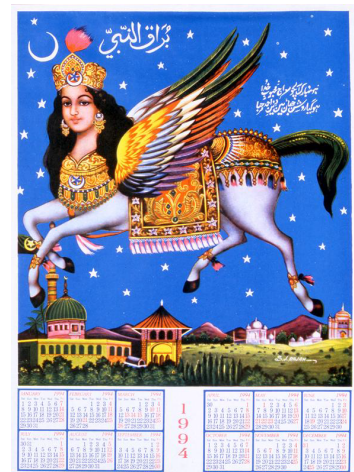
作者不詳 (インド)
「カーリー」19世紀後半



2 イスラーム

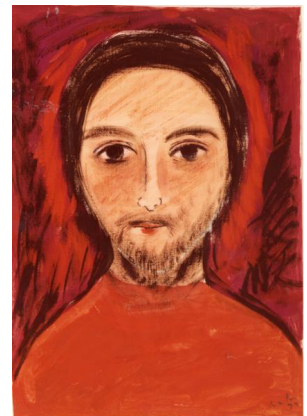
南アジアでは 11 世紀以降、北インドを中心にイスラーム系王朝の統治を受けてきました。現在でもパキスタン、バングラデシュ、モルディブでは、ムスリムが圧倒的多数を占め、インドでも 1 割以上、つまり 1 億人以上のムスリム (イスラーム教徒) が存在します。しかし、宗教美術という側面で見ると、唯一絶対の神アッラーを信仰するイスラームは、偶像崇拜を徹底的に排除したため、カリグラフィや建築、書物の挿絵 (細密画) などは発達しましたが、ヒンドゥー教や仏教のように神話的世界が表象されることはほとんどありませんでした。このコーナーでは、当館所蔵品の中からバングラデシュの絵付カレンダーを紹介します。

S.J. ラジャン (バングラデシュ)
「ブラク」1993年



3 キリスト教

大航海時代 (16 世紀) のポルトガルが、インド南西部のゴアやカリカットに拠点を置いたため、南アジアのキリスト教徒 (多くはローマ・カトリック) はこの地域に集中しています。しかし、ヒンドゥー教やイスラームと比較すると数は非常に少なく、キリスト教美術も多くありません。それでも南アジアの画家たちにとって、西洋絵画とその本流ともいえるキリスト教美術の影響は決して小さくありません。たとえば、ヒンドゥーの神話世界に新しいイメージを吹き込んだラジャー・ラヴィ・ヴァルマー。また、スリランカのマルガワゲ・サルリスもキリスト教美術のイメージを援用し、仏教的世界を絵画化しました。このコーナーでは、インドの民俗画を源泉に独自の造形表現を磨きつづけたジャミニ・ロイと、スリランカの女性画家ナリーニ・ジャヤスリヤの作品を紹介します。



ナリーニ・ジャヤスリヤ
(スリランカ)「キリスト」1977年